



Title	リチャード・レッドグレイヴの絵画とデザイン
Author(s)	竹内, 有子
Citation	デザイン理論. 2011, 57, p. 106-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53482
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

リチャード・レッドグレイヴの絵画とデザイン

竹内有子／大阪工業大学非常勤講師

はじめに

リチャード・レッドグレイヴ (Richard Redgrave, 1804-88) は、19世紀英國において、画家としてのみならず、デザイナー・デザイン教育者・著述家・官吏などとして多方で活動した人物である。今日、彼の名を知らしめているのは、物語性をもつ主題絵画である。レッドグレイヴは早くも1840年代に、社会的に弱い立場にあった女性をテーマに取り上げた諸作品を描いた。これまでの先行研究は、それらを「社会的写実主義 social realism」を示す作品として評価してきた。しかし遅くとも1840年代末以降、レッドグレイヴは風景画をロイヤル・アカデミーに継続的に出品しはじめ、物語画よりも風景画の制作に力を注ぐようになる。これは、当時彼が官立デザイン学校で植物画について教鞭をとることになったことと関連する、と指摘されている。それでは、レッドグレイヴの絵画とデザインには、いかなる思想のもとに、自然が表象されたのか。

本発表の目的は、レッドグレイヴの著述を手がかりとして、彼の絵画がもつ特質を指摘したうえで、彼の画業とデザイン論を連結させ、そこに内包され展開してきた芸術観の一端を明らかにすることである。

1. 主題絵画への取り組み

レッドグレイヴは、1826年にロイヤル・アカデミーの美術学校に入学した。彼は1839年にアカデミー展に出品した2枚の画で良い評価を得たのを契機に、アカデミー正会員への道を歩む事になる。アカデミー内部で、同時代の出来事を扱う風俗画が成立する、新しい

動きが現れはじめたころであった。

説話画においてレッドグレイヴは、レノルズの時代に絵画の欠点と認識された、画面の中で物語を進行する「時間性」を積極的に認める。彼曰く、物語性を有す風俗画とは、限定された「カンヴァス上に人生の話を語るに等しい」。その主題選択は、「彼〔画家〕の身辺の生活であれ、現代の歴史からであれ、実際に起こった出来事や行動を描写するのが最良」であった。こうしてレッドグレイヴは、同時代の人々が知る現実的な社会問題を、最初に主題に取り上げた画家の一人となる。彼の意図は、辛い境遇にあえぐ人々の人生の中にある苦しみや哀しみ、つまりは目には見えない内面の真実を描きだすことになった。

2. 風景画の制作

レッドグレイヴは風景画の理想について、「自然に基づいてカンヴァスに描くよりも、むしろスケッチと細部のデッサン、時間と季節の諸効果について念入りに判断」するよう訴える。そのうえで、「自然の外観のみならず、その細かな細部を全体から独立したものとして扱い、且つ注意深く諸部分を模写」する「概括的な処し方」が必要だと論じた。すなわち自然は「一般化」され、画を構成する全体性が細部の描写よりも優先される。レッドグレイヴにとって、自然をあるがままに写すことは、アカデミーが慣わしとしたとおり「芸術の最も低い性質」を示した。彼によれば、自然の単なる写実的模倣を回避する手立ては、画家が記憶と想像力を駆使して、自然を抽象しカンヴァスに再現することにあった。1850年、アート・ジャーナルの記事は、

レッドグレイヴの風景画に触れ、「柳で縁取られた川岸、スゲの茂る川淵の真に迫った模写」とそのイメージを伝えている。同誌は59年、「レッドグレイヴ氏はラファエル前派に属していないものの、彼の画は細部についてそれと同じ位の注目、豊かな色彩、〈芸術界の新しい光〉の腕前からなるどれもを示している」と記す。彼の風景画については、当時から「ラファエル前派に似ている」とされ、今日においても「ラファエル前派に影響を受けていた」と記される場合があるが、それは正確ではない。兄サミュエルとの共著『英国画家たちの一世纪 A Century of British Painters』の記述において、彼は、ラファエル前派の直写主義とは、画を学ぶものにとつて通過点に過ぎないとしているからである。

レッドグレイヴは、画家が画面構成を検討しつつ創意を発揮することを前提としたうえで、別個の要素として自然細部の観察を主張したのであるから、実質上、ラファエル前派の目指す絵画とは違っていた。

3. デザインと自然研究

1847年、レッドグレイヴは、官立デザイン学校において植物学および植物画を担当する講師に任用される。彼はデザイナーが自然を直接観察して、それをモチーフにするよう指導する。新しい装飾を生み出すためには、自然が深く研究されるべきであった。50年代になると、レッドグレイヴのデザイン教育は、装飾よりも先に有用性を考慮するよう提言したことによって、厚みを増す。製品の構造とは、必然的に目的を示す。だから、装飾は構造に従属するのだ、と彼は主張した。同校でレッドグレイヴは、「自然主義」の名のもとに行われている模写的な装飾表現を、それが芸術の出発段階に位置づけられるがゆえに戒め、抽象的な装飾デザインを推進した。

自然の対象は、目には見えない真実、本質

的な事柄を表象する。それゆえデザインにおいては、自然の営みに隠された普遍的な成長の法則、幾何学的な規則性すなわち、シンメトリー・部分の一一致・反復が見出されて視覚化されるべきだ、とレッドグレイヴは論じる。

彼の主眼点は、生徒が絵画とデザインの違いを認識して、対象となる自然から美しく優雅をもつ諸質を選択し抽象化することにあった。それは、デザイナーが植物個々の特殊性を排除して、その全体的構造を優先することを意味した。このようにレッドグレイヴは、可視世界からイメージを抽象しながら、不可視の真実、すなわち自然の適合性を芸術に表現しようとしたのであった。

おわりに

レッドグレイヴの説話画とは、同時代に生きる人々の人生に有る真実を可視化することを目的としていた。一方、彼の風景画とは、構成された全体と観察された細部により立脚する。そこに表される自然のイメージは、画家の精神によって捨象される。デザインにおいては、目には見えない自然の成長の規則性が抽出された。

再現的絵画を描いた活動前期と、後期の機械生産を念頭に入れた抽象的デザインの推進は、一見、繋がりがないように見える。だがレッドグレイヴの絵画とデザインの実践は、一貫した芸術活動であった。全体的構成への意識は、デザイン理論に等しくみられたように、彼の中に常に存在した芸術創造の土台であった。物事の奥に潜む本質的事柄を表現することが、芸術家の使命であり続けた。そして次なる時、絵画とデザインを区別する合目的性への注視が、彼のデザイン論を発展させ、装飾の新しい抽象へと向かわせたのである。